藤岡朝子氏の解説と記録映画『一緒の時（Wellspring）』の上映

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学院教養デザイン研究科 公開日: 2013-05-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 丸川, 哲史 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/14243

【映像資料プログラム】

藤岡朝子氏の解説と記録映画『一緒の時（Wellspring）』の上映

丸川 哲史

〈企画のねらい（丸川からの説明）〉

近年、日中間での経済的な結びつきが日を増して増加していることは、誰しもが実感していることである。しかし日本のマスメディアも含め、日本内部で作られた中国イメージには、あまりにも表面的な描写が多く、また既知の知の枠組みの内部でパターン化した解釈によって埋め尽くされているものが多い。その中で、中国ドキュメンリー映画というもの、特に政府機関から独立した、インディペンデントな映像作家による表現は、中国内部にある真実や矛盾に向き合う気概が強く、また近年、多くの国際ドキュメンタリー映画祭において受賞を果たすなど高い評価を得ている。中国ドキュメンタリーフィルムを上映することは、中国社会を理解する上で大きな効果を持つものと期待できるのではないか。

もう一つは、山形国際ドキュメンタリー映画祭の存在を是非とも紹介する必要があること。世界の新しいドキュメンタリー映画を取り集めた上映する試みとして、日本の地方都市（山形）が選ばれ、文化交流の場を実現し得ていることは、日本において貴重なあり様であり、是

非とも紹介されるべきもの、と考えた。山形国際ドキュメンタリー映画祭は、二年に一回行われているが、そこで受賞した映像作家の多くが世界で活躍する機会を得ることになる。山形映画祭という場は、既に世界的な認知を得ているのであるが、特に、中国のドキュメンタリー映画の発展に寄与している側面も強く指摘できる。山形映画祭は、九〇年代まで中国国内では中々大規模な上映の機会を得られない中で、新しい中国人ドキュメンタリストを発掘する機能を果たして来たと言える。中でも、実行委員の藤岡朝子氏は、中国のドキュメンタリストから大きな信頼を勝ち得ている。

〈ドキュメンタリー作品『一緒の時（Wellspring）』（四十九分）の概要〉

『一緒の時』は映像作家、沙青氏とその伴侶で製作を手掛ける季丹氏が甘粛省のある村に住む家族を内側から記録したドキュメンタリー作品である。主人公となるのは、その家族の中で育てられている脳性マヒの少年である。この少年は、いわゆる知性はあるものの、運動機能の障害により、歩行もできず、また健常者が通常行っている会話もできない状態である。家族は、少年の足の動きによって、彼の意志を確認する方法をとっている。この作品内部の時間では、少年のめんどうを見て来た母親が現金収入を得るために出稼ぎに出なければない状態になっている。家族の意志として、子どもに手術を受けさせ、歩かせてみたいという願望を持っており、そのために、母親が遠方にある割の良い仕事に出るようになっている。また、近くに住む母方の祖父も手術代を捻出するために、牛を売ろうとしているが、実際のところ、手塩に育てた牛は手放しにくく、そのために少年の父親との間で諍いも起きている。しかし実際、少年に対する手術が首尾よく成功する可能性も極めて低いことが分かり、どうすればよいのか父親は悲嘆にくれている。そしてこの作品の時間の中で、少年は徐々に衰弱して行くのである。作品のラストシーンは、少年の父親が井戸を掘り直しているところで終わる。復活する見込みがないと思われていた井戸から水がもう一度湧くという出来事が象徴的に配され、少年の救済が暗示されて作品の時間が閉じられる。

〈山形国際ドキュメンタリー映画祭実行委員・藤岡朝子氏による解説〉

中国のドキュメンタリー作品は、八〇年代までは、官製のものがほとんどであり、例えば障害者を扱った作品にしても、政府の宣伝的な要素が強く、また典型的とも言えるメロドラマ仕立てにするため、過剰な「工夫」が施されていた。しかし九〇年代以降において、旧来のドキュメンタリーとは違う作風の、また違う配給のされ方をともなうドキュメンタリー作品が登場して来ることになる。まずそこには、デジタル・ハンディカムの開発と流通が大きな要因となる。作品を一人で撮り、またそれをパソコン上で完成することが可能になったからだ。政府系列の映画会社、テレビ会社のような形で政府の認可を得た映像作りを追求する必要性から解放された人々が出て来ることになった。それらインディペンデントな態度を採る作家たちが、九〇年代後半から国際舞台も含め、また国内では大学の中、映画カフェなどを拠点にして活動し始めることになった。総じて彼らの作風は、かつての政府系列の宣伝的な要素、過剰な「工夫」や価値観の押しつけを排した撮り方など、共通の作風を創り上げて来た、と言えるだろう。

〈主たる観客からの感想、質問〉

感想一

障害者を取り巻く視線として感じたことで、街の中で少年をまじまじと近くによって観る市民がおり、日本の街とは違った「眼差し」があることが確認できた。冷たい視線であると言えるが、非常にリアルな反応を作品に収めたものと思えた。

感想二

障害者の少年に対して決してうまくはない、姉（少女）の介護のあり方など、メロドラマでは収まらない要素をきちんと捉えている。

感想三

牛を売りたくないお祖父さんの牛への愛情がうまく撮れている。ある意味では、孫よりも、牛の方を愛しているということで、一般的な家族愛の文脈を外したことになるのだが、その方がリアルなのであろう。

質問

このような映像作品に関して、当局からの検閲などはないのか？

答え（藤岡氏）

ドキュメンタリー作品を作ることに関しては、許可など不要である。無数に撮られているものなので、いちいちコントロールもされないのである。ただし、大規模な商業映画館にのることはない。しかしそれはまた、インディペンデントな作家たちが、初めから商業映画館で上映されることを念頭においていないからである。